キリシタン資料に見る日本語教育

－規範意識と教育理念－

宮　武　利　江

１．中世日本におけるキリスト教布教活動のための教育

16c半ばから来日した、特にイエズス会のポルトガル人を中心とするキリスト教宣教師たちは、16c末から17c初にかけて日本で多くの文献を出版した。これらは「キリシタン版」、最近は一般に「キリシタン資料」「キリシタン文献」と呼ばれている。

日本にキリスト教を伝えたとして著名な宣教師フランシスコ・ザビエルが来日したのは1549年だが、彼が2年後にインドへ戻った後、しばらくは日本での布教活動は滞っていた。しかし、1579年にイエズス会の東インド管区巡察師として来日したアレッサンドロ・ヴァリニャーノは、彼の布教方針であった「適応主義」に沿って、1580年にセミナリオ（Seminario(小神学校)）2校、ノビシアド（Noviciade(修練院)）、続いて81年にコレジオ（Collegio(大神学校)）を開設し、自らも教育に携わった。これにより、日本人司祭の育成と宣教師の日本語教育が組織的に行われることとなったのである。適応主義とは、高橋（2016）によると「布教地諸国民の人種、言語、民族、文化、社会、道徳、心理、宗教などの特異性を考慮し、人間性という共通の遺産を反映する各文化の健全で有効かつ優れた価値を認め、保存し、高めて利用するよう、出来る限り最大の理解を持って宣布すること」であり、ヨーロッパから各地に派遣される宣教師たちに、「宣教国の文化、生活・習慣、言語を尊重して、その国・民族の中に生きている良いものを取り入れて行く」よう求めるものであった。日本においても、宣教師たちは日本語と日本文化、生活・習慣を身に付けるべく、日本語学校での一定期間の学習が義務付けられた。（日本語学校については、高橋（2011）が「ヴァリニャーノの第一回協議会諮問第八の「裁決」によってその存在が解る」とする。）

２．キリシタン資料の種類

コレジオは1590年に島原に移り、そこで日本初の活版印刷機による出版が開始される。（印刷機もヴァリニャーノの再来日時にもたらされたものである。）さらに91年に移転した天草で、まず『サントスの御作業の内抜書』が印刷され、続いて92年に『（天草版）平家物語』、93年に『エソポのファブラス（天草版イソポ物語）』と、以後20年足らずの間にさまざまな「キリシタン資料」が刊行された。

日本で出版されたキリシタン資料は、福島(1973）によると、「普通、29種をさす」とあるが、近年ではその後発見されたもの1編や断簡2種を加え、32種を数えるのが一般的かと思われる。この中に含まれる文献は、

1）キリスト教教義書（『どちりな・きりしたん』（国字本（漢字仮名交じり表記）とローマ字本がある)、『ヒデスの導師』（ローマ字)、『こんてむつすむん地』　（国字・ローマ字）等)、聖人伝（『サントスの御作業』（ローマ字）等)、典礼書（『サカラメンタ提要』（ラテン語・ローマ字含む)）など
2）辞書（『羅葡日対訳辞書』、『日葡辞書』、『落葉集』（漢字字書)）
3）文法書（『ラテン文典』（ローマ字)、『ロドリゲス日本文典（大文典)』（ローマ字)）
4）日本語教科書（『平家物語』『エソポのファブラス（天草版イソポ物語)』（口語、ローマ字）『金句集』（文語・口語、ローマ字)、『朗詠雑筆』（国字）等）

と、多種に渡っており、表記も用語もさまざまである。日本人にキリスト教やラテン語を教えるためのものと、ヨーロッパ人に日本語を教えるためのものの双方があると言える。

これらキリシタン資料の中で、ローマ字表記の『平家物語』『イソポ物語』は、日本語教科書と位置づけられる。『平家』の扉は「NIFONNO COTOBA TO Historia uo narai xiran to FOSSVRV FITO NO TAMENI（日本の言葉とイストリア（歴史物語）を習い知らんと欲する人のために)」と始まり、「世話（口語）に和らげたる平家の物語」と続く。また、『イソポ』の扉には「Latin uo vaxite（ラテンを和して）Nippon no cuchi(くち＝口語）to nasu mono nari」とあり、日本語の口語体で書かれた日本語学習用のテキストであることが明示されている。これは、イエズス会の日本語教育では、まずは口

語から学ばせるという方針があったことを示していると考えられる。また一方で、『イソポ』冒頭では「読誦の人へ対して書す」として、人は得てして実もない「戯れ事」はよく聞くのに、「真実の教化」を聞くと退屈してしまうから、耳近い話を集めた（が、中に良い教訓を含む）この物語を出版するのだと言っている。「これまことに日本の言葉稽古のために頼りとなるのみならず、良き道を人に教え語る頼りともなるべきものなり。」と結ばれていて、日本語を学ぶためだけではなく、説教等の材料にも使える内容の文書が選ばれていることがわかる。

３．キリシタン資料の日本語に対する規範意識

さらに注目すべきは、たとえば「日本」の国名を『平家』では最初に「NIFON（ニホン）」としているのに対し、『イソポ』では「Nippon（ニッポン）」としており、両者は異なっている。これは編著者による違いというよりは、当時も現代と同様、「ニホン」と「ニッポン」が併用されていたことを反映し、あえて異なる形を出したと考えるべきであろう。これらのテキストは、規範的語彙・語形を学ぶための「教科書」とはいえ、いや、だからこそ、当時の日本語の（話し言葉の）実態に即して、複数の「言い換え」型をも提示しているのである。

キリシタン資料各種のうち、日本語を学ぶ者にとってまず「規範」となると考えられるのは辞書類であろう。現在、日本語訳が出版されていて、その内容を容易に確認できる『日葡辞書』において、どのように編纂当時の「正しい」日本語が示されているかは、森田（1993）の第Ⅷ章「規範的説明と実用的説明」に詳しい。そこでは、日葡辞書がかなりの語について「類義語間の語形上の相違、あるいは、語の意味や用法上の相違について述べるのに加えて、その価値的優劣をも説明」しているとし、その方法として①Melius（…の方が（価値的に）まさる）注記②Potius（…よりむしろ勝る）注記③Proprio（本来の、正しい）等注記④その他注記（普通には、一般には、多く用いられるのは、等）4種を挙げて、価値的判断を示す①②にはおそらく意味上の区別はなく（②は羅葡日辞書に用いられた古い用語で、①が新たな用語かと考えている）、③は語形としてまず示したものが変化形であって、その後に原形を記す際の注記（「Coide.（漕イ手）　櫓・櫂を漕ぐ者. *A propria palaura*（本来の正しい語）はCoguite（漕ギ手）であ

る.」)、④は使用頻度や通用性により間接的に規範を示したもので、原形・原義よりも「普通に」通用している変化形・転義を示す際等に用いられたと解し、「Xecchin.（雪隠）北の方にある便所. ただし，一般には（*comummente*）どちらの方角にある便所にも言う.」などの例を挙げている。さらに、見出し語に用いられている「l,（または)」に着目し、「Camaite.l,camayete（構イテ.または,構エテ)」の見出しがある一方で「Camayete.l,camaite」もある場合のように、二つの語形が相互に入れ替えて立項されているものは、その両者は「互いに優劣なく」、「Aratana.l,ataraxij.（新たな.または,新しい)」の見出しがあるが、「新しい」は「Ataraxij.」と単独で掲げられていて「aratana」が示されていないような場合は、多く①②注記があることからも、一形だけ（この場合「新しい」）の見出し語形が標準形で、もう一方(「新たな」）は「それに劣る同義語」であると認められることを指摘している。(ちなみに、先に挙げた「日本」の国名について、『日葡辞書』では「Nifon」「Nippon」はどちらも単独で見出し語として立っており、優劣に関する注記もない。）その上で、語形について言えば、全体的には「語の古い原形が規範とされたように認められる」のに対し、意味用法については「転義の方をまさるとした例ははるかに多い」ことが、『ロドリゲス大文典』で述べられている「立派で上品な言葉は古語である. …それにも拘らず、適切にして真実の意味は現代人が使っているものである.」という見方と合致すると言い、結論として日葡辞書の規範意識は「当時の日本人の規範意識を基準としたものに違いない」としている。確かに、清少納言や兼好法師も新しい語形を批判し、現代人の我々も少し前の時代の言葉を「正しい日本語」と意識している。しかし、意味用法については変化後を正用とするには、相当な通用度の高さが必要ではないだろうか。ロドリゲスが先の記述の後に「諺」として示した '詞は古きを用ゐ，情は新しきを本とす'（『近代秀歌』前文「詞は古きを慕ひ、心は新しきを求め、…」を基とするとされる）が、必ずしもその本義を正しく捉えて引かれているとは思えないところがあり、当時の日本人の「一般的」な規範意識を示すものと考えるには無理があるように思う。そもそも、「一般的」に規範意識を持つと考えられる識者は、いつの時代も自分の知っている「古い」言葉（語形も用法も）を正しいと考え、そうでない者は知らずに新しい語形や用法を使う。日葡辞書の、語形については非規範形からも引けるよう見出し語に掲げ、意味用法については社会的通用度

や使用頻度に重きを置くという姿勢は、やはりこの辞書が非日本語母語話者の学習に資するものとして、実用に配慮して編纂されたものであることを反映しているのではないだろうか。この点については、森田（1993）も第Ⅷ章末尾で「（日葡辞書のさまざまな説明法は）日本在住の西欧人宣教師を対象として，その日本語学習を有効適切ならしめるという基本的立場から生み出されたものであって，すべては実用性の重視という一点に集約されるものと言えよう.」と述べており、結論的には一致する。

日本人に対し、尊敬を受けられるような（僧侶たちと同じような）「正当な」人物として「正しい」日本語で説教をしたり、有力者と交渉をしたりするためには、規範形を学ばなければならないが、一方でさまざまな日本人の告解を聞いて理解するためには、通用している俗語形等のバリエーションも知っておく必要があったということである。

そして、その中には、語形語義の変化の途上にあるような例も含まれている。例えば、「母」の見出し語形が「Fafa（ハハ）.l,faua（ハワ）」及び「Faua.」となっていて、この頃「母」の発音がハ行転呼を起こした「ハワ」の形の方が規範的で、「ハハ」はそれより「劣る」語形であったこと、しかし両者が使用されていたことが知られる。付言すれば、これらは漢字や仮名表記による文献では判断の難しい当時の発音が、ローマ字表記によって明らかにされたために確認できたものでもあり、辞書類の語義説明のみならず『文典』の文法的解説や方言、各種敬語法などへの詳細な言及とともに、キリシタン資料が日本語史の貴重な資料となっている所以である。

４．ロドリゲスの日本語観と日本語教育観

1577年に未成年で来日し、日本でイエズス会に入会したジョアン・ロドリゲスは、コレジオで学んで司祭となり、1610年に家康に追放されるまで、権力者との交渉にあたったり、初期には日本人にラテン語を教えたりもした。彼は生涯に二種の日本語の「文典」をポルトガル語で上梓している。一つめは1604～08年に長崎で刊行された『日本（語）文典』（日本大文典とも）、二つめは1620年にマカオで刊行された『日本（語）小文典』である。『大文典』では、ラテン語の文法構造をもとに日本語の文法を解説、他に発音、文字、語彙、文体、待遇表現、方言に加えて、書状の書き方、数詞や時刻・方位などの文化的

背景の理解を要する語彙に至るまで、当時の日本語に関する広範な記述が見られる。しかし、あまりに詳細かつ多岐にわたる規則が「混乱の種となるおそれがあるため、…要点を抽き出して簡潔にまとめ、初心者にとっていわば大文典への手引きとなるようなものをつくる必要があると考えた」（冒頭、「読者へ」、以下も引用は岩波文庫本本文より）ため、著された要解が『小文典』である。以下に『日本小文典』の記述についてまとめておく。

（1）日本語の特徴

ロドリゲスは、まず「日本語について心得ておくべき一般的事項」を5点にまとめている。

①文字（漢字）の読み方に「Coye（音読み）」と「Yomi（訓読み）」の2種類があり、それぞれだけの用いられる文体もあるが、現在の共通語は両者が混ざるものである。

②文章体と会話体がある。

③名詞に格や単複の区別がなく、動詞も主語の人称・数によって変わることがない。

④Coyeだけの文体は（要は中国語で）ポルトガル語と語順が同じだが、日本古来のYomiの文体は語順が逆なので、日本語を正確に話したり、ポルトガル語と相互に翻訳したりしたかったら、Yomiのことばにおける語順を知ることが重要である。

⑤動詞と名詞に伴う小辞によって、尊敬・丁寧・謙譲の意を表す。話し相手・話題中の人・眼前にいる人・話題の事柄を考慮に入れ、これらを用いて話すかどうかを判断する。学習者は活用を覚えた後、この点に注意して日本語に上達してゆく必要がある。

ポルトガル語と比較して大きく異なる点を中心に述べていると考えられるが、特に日本の漢字の音訓と漢文体（漢語）と和文体（和語）との関係を理解して指摘していることは学習者にとって重要であり、和語・漢語の混用される口語や、文章体の中でも和文において、語順の習得が肝要となることが述べられている。また、待遇表現が話題中の人物・事物への敬意、聞き手への敬意等、さまざまな要素、つまり敬意の方向によって3種類のタイプが使い分けられているということを押さえているようで興味深い。

日本語の待遇表現の複雑さや語彙の文体差などの特徴については、ロドリゲスに先立ち、ヴァリニャーノが言及していることが先行研究で取り上げられている。ヴァリニャーノは1583年にローマの総長宛に

報告書（『日本諸事要録（Sumario de la Casas de Japon）』、以下引用は松田（1973）より）を書いているが、その中で日本語について「これは知られている諸言語の中でもっとも優秀で、もっとも優雅、かつ豊富なものである。その理由は、我等のラテン語よりも豊富で、思想をよく表現するからである。」と述べている。続けて、その「豊富」の内容として、「同じ一つのものを意味する名称が数多くある」「対応する相手の人物や事物の階級に応じて、高尚、低俗、軽蔑、尊敬の言葉を使いわけなければならない」「口語と文語が異なる」「男女は非常に異なった言葉を話す」「書く言葉の中にも差違があって、書状と書物とでは用語が異なる」点を挙げ、他の箇所でも、「話すのと書くのと説教するのとでは、それぞれ言葉が異なる」「貴人と話す場合と下賤の者と話す場合では言葉を異にする」「漢字にも多様性が無数にある」と指摘する。日本滞在わずか1年で、表現の多様性、待遇表現のさまざま、文体差、さらに文章語の複層性、語彙の性差など、「日本語の「位相差」に関する指摘が列挙されている」（村田2013）ことは、ヴァリニャーノの適応主義に基づく日本語・日本文化に対する関心と教育の必要性の認識を反映するものと考えられよう。これらの特徴は、日本語が習得の難しい言語であることの理由ともされている（「これほど種類が多く優雅であるので、それを習得するには長期間を必要とする。」）のだが、実際、ヴァリニャーノ自身は日本語の習得に成功しなかったと指摘する資料を、村田（2013）が提示している。日本語の特徴に気づいても、それを学習に生かせなかったヴァリニャーノと、より具体的かつ記述的に「文典」としてまとめあげたロドリゲスは、日本語への向き合い方は同じでも、「教育」に対する理念が異なっていたように見える。ヴァリニャーノは『諸事要録』の中で「これ（日本語を深く学ぶこと）は外国人である我等の何ぴとにも到達できないことで、我等はいかに学んでも、言語に関しては彼等に比べると子供のようであり」、「書くことを学ぶのは不可能であるし、人に見せられるような書物を著わすことができるようになることは、我等の何ぴとにも不可能である」と述べていて、日本語学習の限界について諦念のようなものがうかがえる。一方、ロドリゲスは適応主義の枠を超えて、「日本語教育」そのものについて深く考えを巡らした結果、以下のような学習法を提案するに至ったのではないだろうか。

（2）日本語の学習法

先の章に続く「日本語の学習と教授にふさわしいと思われる方法に

ついて」では、「日本語に熟達する二つの方法がある。」として、

①「この地の人々と日常的に交際してこの言葉を用い、人々がさまざまな事柄について話す時の種々の表現・言葉遣いに怠りなく注意を払い、自然にこれを習得する方法」

②「良き教師の指導のもとで文法書を用い文法規則から始め、同時に誤りのない美しい言葉の込められている書物の講義を受け、作文をし、学習にふさわしい訓練を受ける方法」

を挙げる。（これがクラッシェンのモニターモデル中の「習得・学習の仮説」の区別と同じであること、①の方が自然に話せるようになるというのも「モニター仮説」と同じであるという指摘が高見澤（2005）にある。）①の方が確実で、「日本語らしく話せるようになる」が、多くの時間を必要とし、現地の人と常に交際することが必要である点がマイナスであり、②は外国語を短期間で習得したいと願う人に広く行われている方法で、「宣教活動のためにヨーロッパから来る人々は文法書を用い文法規則から入る方法にも慣れている人々であって」、成人だから通例学問の経験があるため、この方法の方が適しているとする。しかし、「要点をまとめた規則や規範に従って学習を進めるので、短期間に多くのことを学べる利点はあるが、この方法で学習した人たちは、例外なく多くの誤りを犯すし、矯正することも進歩することもできない悪い癖がついてしまう」難点があると言っている。

そして、どちらの方法を採るにしても、文字の学習の非常に重要であることを述べ、「このことば（日本語、筆者注）を深く知るためにも、語の構造、正しい発音、日本語の優美、高雅な面を知るためにも非常に有効」であり、①の方法であっても文字の読み方は覚えるべきだとする。

さらに彼の指摘する、日本語が上達するか否かを決める３点は、以下のようになる。

①第一にして最大のものは教師。→　日本語の美しく正しい表現・すぐれた文体・正確な発音についての学識を備えた日本人がよい。ヨーロッパ人は文字や書物の文体などに関する知識が欠けており、適切な表現を教えられない。文法書の規範・規則にも通じている必要があり、また文化的習慣や礼儀作法・芸術・偉人伝などに関わる広範な語彙の蓄積が必要である。

②初期の講読で用いる書物。→　文章体の、評価の高い古典的書物がよい。ヨーロッパの書物の日本語訳・会話体の物語（キリシタ

ン版の平家・対話書なども含む）・仏法書・中国の思想書などは不適。初歩的なものとして会話体に近い舞や草子、続いて撰集抄や発心集、さらに美しい文体を持つ平家・保元・平治物語、太平記などがよい。

③学習の方法と順序。→　教師が文法書に精通していて、規範・規則や品詞の用法を口頭で説明し、それを生徒に復誦させて記憶させることが重要。ただし、動詞の活用プラスαを除く文法書の諸規則を棒暗記させてはならない。生徒は書物の講読を通じて学んでいくべきである。また、生徒に繰り返し文章を書かせることは重要で、日本の古典をポルトガル語に訳したものを日本語に訳す訓練をしていれば、徐々に日本語らしい表現を吸収していく。日本語を学ぶには、ポルトガルの表現や概念を日本語に訳す訓練が必要という考え方は誤っている。使用頻度の高い文字の読み方は覚えて、漢字仮名交じり文を読めるようにしなければならない。また、教師は学習の最初期に自然な発音（音節の長短やアクセントを含む）を指導すべきで、それは日本人でなければできない。

日本人教師が、日本の古典的書物をテキストとして講読しながら、文法事項や発音に注意を与え、幅広く語の注釈を行って生徒に理解を促し、またそれらに類する文体の文章を繰り返し書かせる…。教師の側にも、生徒の側にも、求められているその資質や姿勢は、かなり高度に見える。しかし、実はロドリゲスは先の3点を述べる前に、その対象についてはっきり示しているのである。

ここに述べる日本語学習法の対象は、才能を持ちしかるべき年齢に達している人で、しかも日本語に熟達しようとする意図が、異教徒にむかって自由に説教すること、討論や文書によって異教徒の誤謬と迷信を論破してわれわれに敵対する者から信仰を護ること、…またわれわれに関して書きたいことのすべてを日本語で自然にしかも立派な文体で書き、この王国に見られるあらゆる種類の事物についても、この地の人びとと同じように語り論じられるようになること、すべてこうしたことのためであるとする人びと（Aとする;筆者注）のみである。

一方、キリスト教徒の告解を聴き、キリスト教徒に対し「それぞれの魂にかかわる事柄を語」り、日常の交際に必要なことを話すことができるようになるためだけに「短期間で日本語の理解力を身につけようと考えている人たち（Bとする）」は、「自分にとって最も学びやす

い方法で学べばよい」のであって、Aの人々と一緒に勉強すべきでないと断じている。

学習内容も書物も、学級も学習法も、教師も手段もAの人々に向けたものとBの人々のそれとでは異ならなければならない、というのがロドリゲスの考え方で、それは「そもそも目的が異なっているため」であるとし、このことは②で、教材として会話体の書物を用いてはならないと述べるときにも、Bの人は自分のできる方法で学べばよいと繰り返している。

福島（1990）も指摘しているが、ロドリゲスは、日本語学習者を二つに分けて考えており、一つは、布教活動に従事する聖職者として理想的な、「異教徒のなかで神の掟の導き手となるつもりの人びと」、もう一つは必要最低限のレベルの人である。短期間で異郷においてキリスト教を普及させる使命を帯びた宣教師たちは、必ずしも全てがロドリゲスの掲げる理想像を目指すわけではなかったであろう。ロドリゲスは日本におけるその実務者としての経験から、実用的日本語の習得という観点からの学習法も否定してはいないと思われる。しかし、彼にとっては、より高位の日本語運用能力、さらには異文化に対する理解も身につけた「理想の宣教師」の養成を目指すことが大きな目的であり、その、理想に到達するための学習法・教育法を支える「「文法教科書」とでも呼ぶことのできる著作」（池上（1993）「解説」より）が、二つの文典であったのだろうと考える。

参考文献

福島邦道　1973『キリシタン資料と国語研究』（笠間書院）

福島邦道　1990「キリシタンの日本語学習」（『国語学』161）

熊沢精次　1991「16世紀から幕末開国期までの日本語研究と日本語教育」（『講座日本語と日本語教育15　日本語教育の歴史』（明治書院）

森田　武　1993『日葡辞書提要』（清文堂）

高見澤孟　2005「日本語教育史（2）西洋人と日本語の出会い」（『学苑』771　昭和女子大学）

高橋勝幸　2011「『イエズス会日本コレジョの講義要綱』に見るA・ヴァリニャーノの適応主義布教方針」（『アジア・キリスト教・多元性 現代キリスト教思想

研究会』第９号）
村田昌巳　2013「アレッサンドロ・ヴァリニャーノとヴィンチェンツォ・チマッティ（Ⅲ）ヴァリニャーノと日本語」（『サレジオ工業高等専門学校研究紀要』(40)）
高橋勝幸　2016「Ａ・ヴァリニャーノの適応主義の現代的意義」（『アジア・キリスト教・多元性 現代キリスト教思想研究会』第14号）

松田毅一　他 訳『日本巡察記』（平凡社東洋文庫）※『日本諸事要録（Sumario de la Casas de Japon)』（1583年）と『日本諸事要録補遺（Adiciones del sumario de Japon)』（1592年）を収録。
土井忠生・森田武・長南実　編・訳
『邦訳日葡辞書』（岩波書店）
土井忠生　訳註　『ロドリゲス日本大文典』（三省堂出版）
池上岑夫　訳　『ロドリゲス日本語小文典』上下（岩波文庫）

（本学教授）

文楽鑑賞教室

前年の歌舞伎鑑賞教室に続いて、今回は文楽鑑賞教室に参加しました。まずは「団子売」。華やかな演奏と団子売り夫婦が明るく踊る様子は、人形とは思えないほどなめらかに動いていました。

続いて始まったのは文楽の解説。文楽の道具や太夫などの単語は、音楽の授業などで知っていましたが、実演を交えて見ると、道具や人の大切さが直に伝わってきました。三味線の鳴らし方や太夫の声の使い分け方によって人形の動きが違って見えてくるのです。また、文楽の説明の中で特に私が面白いと感じたのは人形の説明で、「もし本来の動きをしないと?」となったときのことをコミカルに説明していて思わず笑いが込み上げました。

そしてその後に始まるのが今回の一番の見所、「菅原伝授手習鑑寺入りの段、寺子屋の段」。こちら寺入りの段は菅丞相の息子・菅秀才が寺子屋を営む武部源蔵夫婦のもとで子どもとして匿われているある日、源蔵が庄屋に呼ばれてたため妻が寺子の世話をしていると、小太郎という子どもを連れた母親が息子を寺入りさせようとやってきます。源蔵が留守だと聞いた母親は待っている間に所用を済ませようと小太郎を預けて隣町に向かいます。

そして寺子屋の段。源蔵は戻ってきたが顔色が優れない。実は菅秀才を匿っていることが藤原時平に露見したとのこと。そして時平の家臣・春藤玄蕃と松王丸が菅秀才の首を差し出せと迫ったとのことでした。帰ってきた源蔵は小太郎を見て菅秀才の身代わりにしようと思いつきます。やがて玄蕃と松王丸が到着し、松央王丸は小太郎の首を菅秀才の首と判断して立ち去ります。安心したのも束の間、入れ違いに小太郎の母親が帰ってきて、後に引けなくなった源蔵は小太郎の母親に切りかかります。それを母親が小太郎の文庫で受け止めると、中から経帷子と「南無阿弥陀仏」と書かれた幡が。そのとき松王丸が姿を現し、小太郎は息子であり、菅秀才の身代わりのために寺入りさせたと語ります。忠義のため我が子を差し出し、子も親のため主のために命を差し出す姿に、私は思わず人形であることを忘れて心を揺さぶられました。

文楽の鑑賞は今回が初めてで、見る前は感情移入できるかとか、人間の演じる歌舞伎や舞台などには敵わないのではないかとか思っていました。しかしそんなことはまるでなく、太夫、三味線、人形遣い、人形の全て噛み合って見るものに感動を与えます。そこに歌舞伎や能、狂言と同じく現在までその技術が受け継がれている理由が少し理解できたように思えました。身近に古典芸能を生で見る機会は少なく、そういった面でもこの文楽鑑賞教室はとても良い経験となりました。日本の古典芸能を見たことないという人は、おそらく「実際はそんな面白くなさそう」だとか「太夫が何を言っているのか分かりづらい」とか思っているのではないでしょうか。実際見ると内容は現在でも面白く、太夫の台詞も舞台横のスクリーンに流れます。見たことがない人は、是非とも先入観を一度捨てて鑑賞してみてほしいと思います。文楽の魅力、ひいては日本の魅力の一端を感じることができるはずです。

（国語二年　新船律）